

主 文
原判決を破棄する。
被告人は無罪。

理 由

本件控訴の趣意は、弁護士吉本登作成の控訴趣意書に記載されているとおりであり、これに対する答弁は、検察官上西一二作成の答弁書に記載されているとおりであるから、これらを引用する。

控訴趣意第一点（ただし（二）の4を除く）は、要するに、本件事案に対して風俗営業等取締法七条一項、二条一項が適用されているが、その前提をなす同法一条二号にいう「客の接待」とは、客に遊興をさせる場合はなおさらのこゝと、客に飲食をさせる場合であつても、日常使われている意味の接待とは趣を異にし、なんらかの点で享樂的雰囲気や射倖心をそそるなど風俗犯罪を誘発させるおそれのあるものでなければならぬものと解すべき、したがつて、本件のように客が子供の補導教育に関して思わずもらい泣きをするようなまじめな世間話をしていさいに、その話相手になつてやることも、右法条にいう客の接待にあたらないこととは明らかであるにもかかわらず、本件被告人の行為が右にいう客の接待をした場合にあたりとした原判決の判断は、法令の解釈適用を誤つた結果、事実を誤認したものであり、なお、原判決は、前記風俗営業等取締法一条二号の構成要件について、客の接待をして客に遊興をさせる行為と客の接待をして客に飲食をさせる行為とに區別して理解すべきところを、この區別をせず客の接待をして遊興飲食させる行為を対象とした単一の構成要件であるとしている点にも法令の解釈を誤つた違法がある、と主張するものである。

そこで、所論の点を検討してみるのは、被告人が、兵庫県公安委員会の許可を受け、Aを接待し、ビール等を提供して飲食させ、もつて設備を設けて客の接待をして客に遊興又飲食させる営業を営んだものであるとの起訴状記載の公訴事実に対して、原判決は、被告人において、右公安委員会の許可を受けるとなく、右の日時店舗において、飲食客であるAにビール等を提供して飲食させるかたわら、そのそばに腰をかかけ、同人の相手となつて世間話をするとともに、従業員（女性）にも同人のそばに腰をかかけて話相手をさせ、もつて客に遊興飲食をさせる営業を営んだものである旨の事実を認定し、これに風俗営業等取締法七条一項、二条一項を適用していること、会は、訴訟記録によつて明らかである。ところで、同法一条一項が所轄県公安委員会の許可にかからしめている風俗営業の種別は、同法一条の各号に列挙されているが、本件のごとき飲食店営業の場合に問題とされるべき同法一条二号には、「設備を設けて客の接待をして客に遊興又は飲食をさせる営業」と規定されていることから見て、同法が、「設備を設けて客の接待をして客に遊興をさせる営業」と、「設備を設けて客の接待をして客に飲食をさせる営業」とを區別して規制の対象としているものと解すべきことは所論のとおりと考えられる。この点において、本件起訴状記載の公訴事実ならびにこれに対応する原判決の事実摘示および弁護人の主張に対する説示の部分が、右規制の対象となるべき営業の内容についての的確に構成要件上の把握をしていない、きらいのあることは否定しがたいにしても、右が訴因又は認定事実の不特定を招くほどのかしに於けるものとは解されないもので、この点はいずれの場合におき、同法にいう営業の内容として「客の接待」をしたかどうかがいずれの場合にもまず決定されるべき必要不可欠の事項であり、本件の主要な争点もまたこの事項に関する解釈のいかんにかかつてゐることは、右の規定および事案に徴して明白である。そこで、同法にいう「客の接待」の意義について考へてみる。と、風俗営業等取締法が、その業態において、客の間に過度の享樂的雰囲気や射倖心をそそるおそれのある接客営業について各種の規制を設けている趣旨に照らせば、客に遊興をさせる営業の場合には勿論、客に飲食をさせる営業の場合であつても、客の接待をするとは、社会的儀礼としていわれる客の接待と意味合いが異なり、営業の対象としての客に対し、その慰安歓楽を求める気持ちを迎へて、客の気持ちに沿うべく積極的にこれをもてなす行為を指称しているものとするのが相当といわなければならない。したがつて、客とともに歌や踊りに興じ、そのかたわらにあつてひき続き酒類の酌をし又は談笑の相手となる行為がこれに該当することはいふまでもなく、また談笑の間に単なる世間話程度の話題が提供された場合においても、客の話相手となることによつておのずから酒食の席に享樂的な雰囲気がただようようときには、その話題が世間話であるからといつて、いちがいにはこのように接待にあたらないと断じられない点は、検察官が答弁書において陳述している

(裁判長裁判官 三木良雄 裁判官 木本繁 裁判官 西川潔)